

# 虚空蔵大台滝遺跡の概要と城郭正面観

利部 修（由理柵・駅家研究会）

## 1 はじめに

遺跡は秋田平野の南東端、雄物川の支流で合流点より4km遡った岩見川右岸に接するようであり、その主体は城郭である（註1）。城郭は、和田丘陵の南端に当たる標高約45mの広い平坦面を中心に、隣接した地形で構成される（第1図）。南東部側から見ると、岩見川沿い（標高約10m）を底辺とした二等辺三角形の地形であり、それを城郭の範囲と見ている。大きさは東西約450m・南北約300mあり、北東端の狭まった地形より山岳部へ向かって標高が高くなる。東側約1km（遺跡中心域間）には、戦国期城郭の戸島館跡（中心部標高約85m）が位置する（第1図左上）。

城郭は空堀や沢によって4区域に分かれる。平坦面の大きな区域を郭1、その東を郭2、更に東を郭3、郭1の南側沢を隔てた尾根を郭4と把握し、郭1を本郭、郭2～郭4を支郭と呼称した（利部2022）。発掘調査を実施したのは郭1の平坦部と斜面部、及び沢を隔てた南郭4の尾根部である。郭1は短い方の南辺と北辺が約100mの、南北に長い略平行四辺形を呈する大規模な範囲である。斜面部と尾根部から出土したかわらけにより、郭1と郭4の関連が指摘できた。調査は、秋田空港アクセス道路建設事業に係わって平成16年（2004）に実施したものである（利部編著2007）。以下、11世紀後半の城郭とその前後の関係を主として上記2資料を基に記述する。

## 2 城郭以前と開始時期

遺跡は、事前調査による城郭関連遺構や中世陶器等（16世紀）の成果より、中世城郭と判断され戸島館跡の縄張りの可能性も考慮されていた（小林2004）。調査の結果、遺跡からは縄文時代（前期・晩期）の土器・石器、平安時代の須恵器・土師器・かわらけ、中世陶磁器（15世紀）、鉄製品等が出土し、城郭関連遺構も検出され広大な城郭の一部であることが分かった。縄文時代を除くと、凡そ9世紀以降16世紀に及ぶ遺跡と判断されるが、城郭創建時期の決め手になったのが、郭1の南斜面における遺構・遺物の在り方である。それには郭4から纏まって出土したかわらけも関連する。

本城郭を特徴付けているのが、本郭における防御施設、地形に沿った柵跡・切岸・空堀・土塁の存在である。平坦面下の高さ6.5～10mの切岸、それに接続する空堀、その外側に盛り上げた土塁は一連の作業として構築された（第2図）。

土塁は基底部分が約6mあり版築され、切岸や空堀の掘削土を利用し、空堀の付近で確認できる明黄褐色土を版築土に利用している。また礫層を掘削した切岸や空堀の土砂は、土塁下方の斜面に厚く堆積し（厚い所で凡そ2m以上）、城郭草創以前に構築されたテラス状遺構（SZ1999）及び仏堂に推定した掘立柱建物跡を直接覆っていた。またその柱穴に

は礫が埋め込まれてあり、仏堂廃絶と連動する（註2）。テラス状遺構は地山を掘削した範囲と斜面を埋めた整地層に分けられるが、整地層から④～⑬の遺物が出土している（第3図）。これらを一括土器群Bとした（利部2007）。この上面から見つかったのが、④も含むかもしれないが①～③のかわらけである。これらは、テラス状遺構の生活面から出土し、仏堂廃絶時に伴うと判断できる。このうち小皿①は、虚空蔵大台滝遺跡型（虚空蔵タイプ）の小皿である。従って城郭創建と仏堂廃絶時期をほぼ同時と考えており、城郭創建に伴う虚空蔵タイプ小皿をⅡ期の始まりと把握した。因みに、城郭の始まりから空堀が機能している期間をⅡa期、自然堆積層が土坑（SK1118）に切られるまでの埋没期間をⅡb期、それ以降近世までのⅢ期とした。

城郭創建に関わる小皿の虚空蔵タイプは、郭4とした尾根部に検出したテラス状遺構（SZ1770）から纏まって出土したかわらけ（一括土器群A）のうち（利部2007）、小皿37個体の観察に拠った（第4図）。口径8cm前後・底径4cm前後・器高2.5cm前後、全体に分厚く・底部はやや突出気味・口縁部は直線的に外傾するか外反、轆轤左回りの回転糸切り手法、これらが特徴である。土器群Aの在り方は、散在する焼土も含んで地鎮行為を想定しており、城郭創建期と並行した見解を示した（利部2008）。

第3図④を除く整地層の土器（⑤～⑬）は、概ね仏堂存続以前の土器群でⅠ期と把握できる。Ⅰ期は整地地業から仏堂存続期のⅠb期とそれ以前のⅠa期に分けられる。城郭に関連すると、Ⅰb期の終末がⅡa期のはじめと重なる。土器群Aは、古代末期頃の土器群の在り方から（井上1996）、11世紀後葉と考えている。土器群Bの灰釉陶器（明和27号窯式）⑩は、Ⅰb期の地鎮行為の遺物と考えており（利部2008）、11世中葉に当てている（第1図右上）。一方、⑩の把手付土器は鉄関連遺構に伴う遺物と判断され、いくつかの土師器を含み整地地業以前Ⅰa期の鍛冶炉や焼土遺構等に関連すると考える（註3）。

### 3 城郭の正面観と背後

遺跡の出入口が、沖積地に突出した地形を利用していることから、本郭南西端側が正面と認識できる。城郭の入城に当たっては、出入口南にあり空堀と平行する沢部も利用したと考えられる。出入口の城内側は、空堀と切岸が東に延びる基点に当たっており、平坦部に至るには、これらを辿りながら東側に迂回したと考えられる（第1図）。

東西距離が約100mの本郭南辺は、未調査区においても斜面中腹に溝状の窪地やその外側に線状の高まりが目視でき、空堀や外土塁の存在が確認できる。これらの斜面下方の等高線は、本郭全体の斜面等高線と比較した場合、等高線の間隔が極端に広く、切岸造成の掘削土を斜面下方に堆積させた結果と見られる。また平坦部の南縁の等高線は、縁辺が平坦部の内側に入り込む状況を示しており、切岸や柵列の造作と関連する。

平坦部縁辺の在り方はどうか（第5図）。出入口に当たる正面はコの字状を呈し、その南西側と南側縁辺は、溝の中に杭を打ち込んで連続させた柵跡が数条認められる。一方西側は、溝に間隔を置きながら柱穴が見つかり、板塀等が想定される。総じて、平坦部西側縁辺は板塀等の柵跡、正面及び南側縁辺では杭による柵跡が構築されたと思われる。

平坦部の南西側は、東西に一部杭の柵跡が見られ、その方向が境になって不整三角形の

区域を形成している。この区域は、平坦部の中でもやや低くなり、特に小さな穴が密集していた。城郭を護持する側が、攻撃する側に戦術をしかける工夫が準備されていた地区と想定される。そこから見下ろした所が、攻守の要であったと考えられる。打ち込みの杭による柵跡によって、戦術と密接に関わる地区の撃退施設構造の一端が窺える。

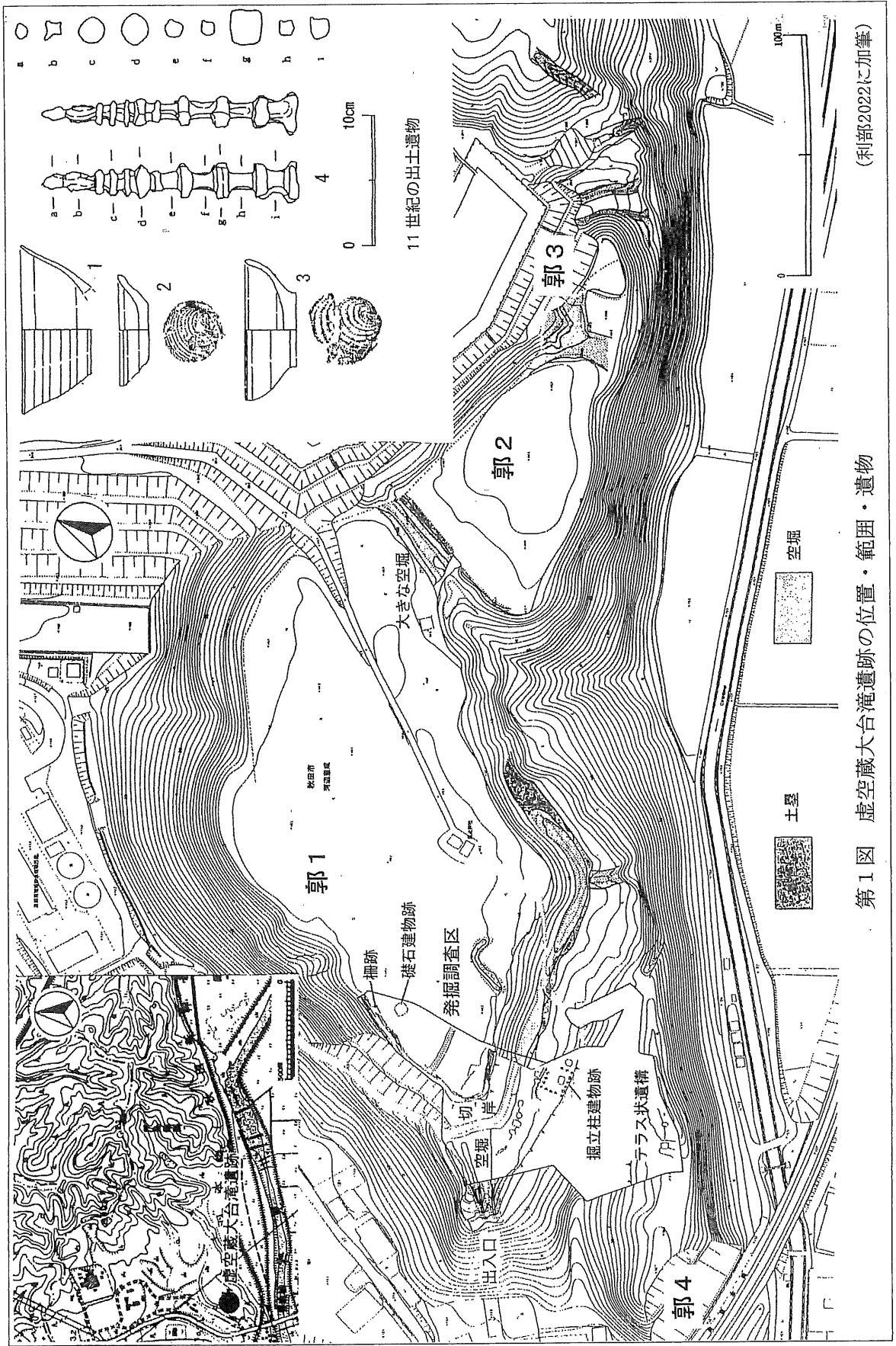
城郭は、虚空蔵タイプのかかわらけの存在等から清原氏系統と考えているが、大鳥井山遺跡の立地と相違する。共に平山城の立地では共通するが、大鳥井山遺跡の入口正面側は微高地で背後が急斜面になる。対する虚空蔵大滝遺跡の背後は、郭3より繋がる山岳地になっている。戦局が不利な場合、山岳地に逃げ込める点を配慮した立地である。つまり沖積地と山岳地を直接繋ぐ場所を城郭としている。近年、院政期から中世とする考えが有力になってきており（山本2017）、古代的な方形基調型城郭を脱した不整形基調型城郭に含まれる本城郭は、中世山城の先駆的な在り方を示しているように考えられる。

#### （註）

- 註1 城跡は古代では城柵、同末期では柵や楯、中世では城館等と呼称され、それらには居館を含んだり、そうでなかったりと紛らわしいので、城跡を考古学的用語として用いる場合は居館を切り離し、近世で一般的な「城郭」用語を使用する（利部2022）。
- 註2 切岸や空堀の土砂を古代末頃とする考えに、羽柴直人は「中世後半の城館普請の際に生じた堀、切岸の掘削土」としており（羽柴2010）、土砂の解釈に違いがある。
- 註3 伊藤武士は、虚空蔵大台滝遺跡の城郭内機能として斜面平場の鍛冶を取り上げるが（伊藤2022）、鍛冶炉は城郭以前の遺構であり誤認している。このことは、大鳥井山遺跡の生産遺跡や他の遺構が、城郭に伴うかの注意を喚起したことにもなる。

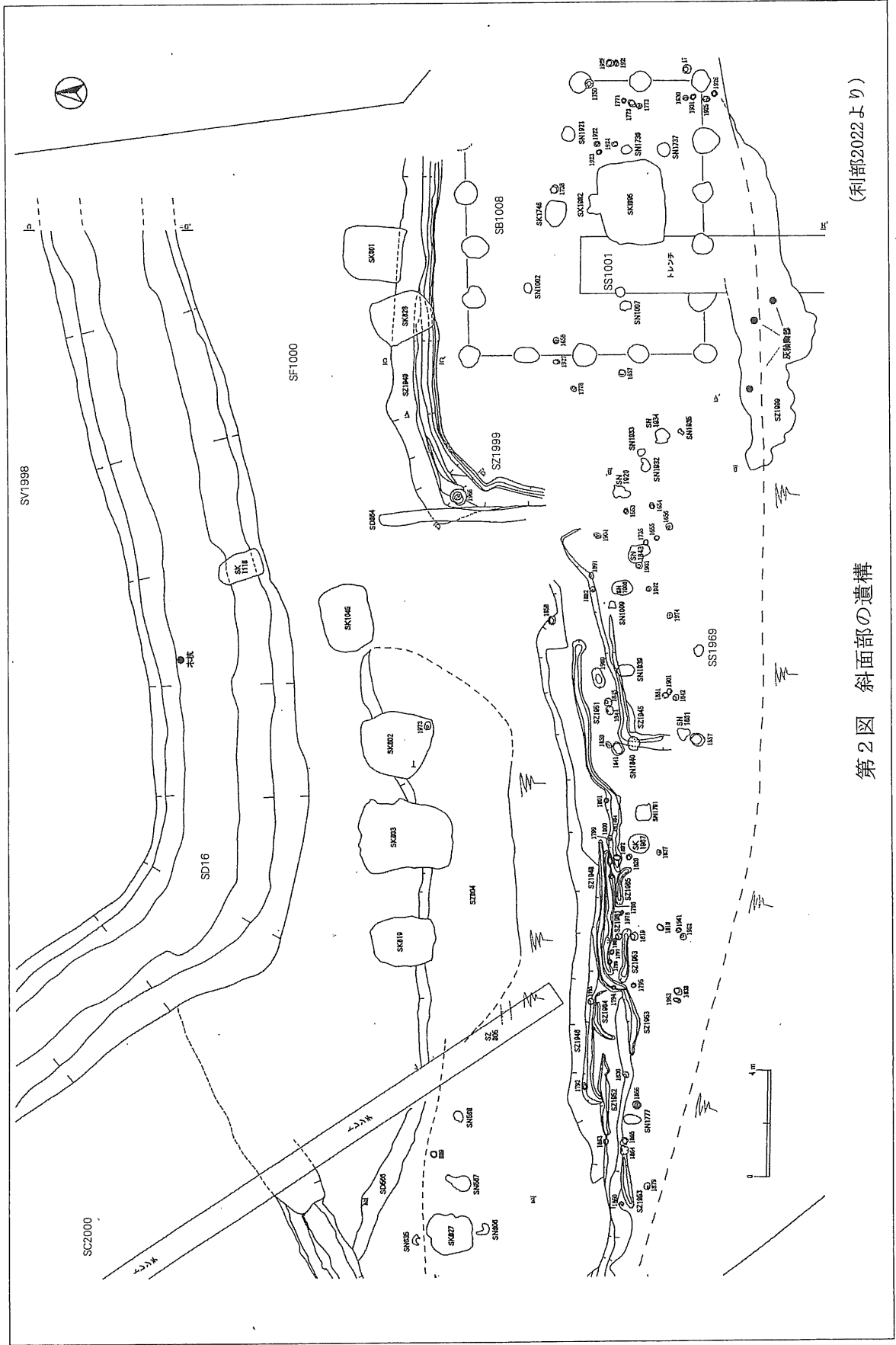
#### （引用・参考文献）

- 伊藤武士 2022「古代出羽国北部における地域支配の特質—地域支配拠点としての古代城柵と柵—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第232集 国立歴史民俗博物館
- 井上雅孝 1996「岩手県における古代末期から中世前期の土器様相（素描）」『中近世土器の基礎研究』X I 日本中世土器研究会
- 利部 修編著 『虚空蔵大台滝遺跡—主要地方道秋田御所野雄和線秋田空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書第416集 秋田県教育委員会
- 利部 修 2007「虚空蔵大台滝遺跡のかかわらけ—北奥羽における編年学的位置付け—」『列島の考古学Ⅱ—渡辺誠先生古稀記念論文集—』 渡辺誠先生古稀記念論文集刊行会
- 利部 修 2008「虚空蔵大台滝遺跡の呪術・祭祀・信仰—平安時代後半と中世後葉の心象風景—」『生産の考古学Ⅱ』 同成社
- 利部 修 2022「虚空蔵大台滝遺跡を通じて—城郭構造の視点から—」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第10集 岩手大学平泉文化研究センター
- 小林 克 2004「①虚空蔵大台滝遺跡」『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第380集 秋田県教育委員会
- 羽柴直人 2010『東日本初期武家政権の考古学的研究—平泉勢力圏の位置付けを中心に—』 140頁
- 山本博文 2017『歴史をつかむ技法』 新潮社



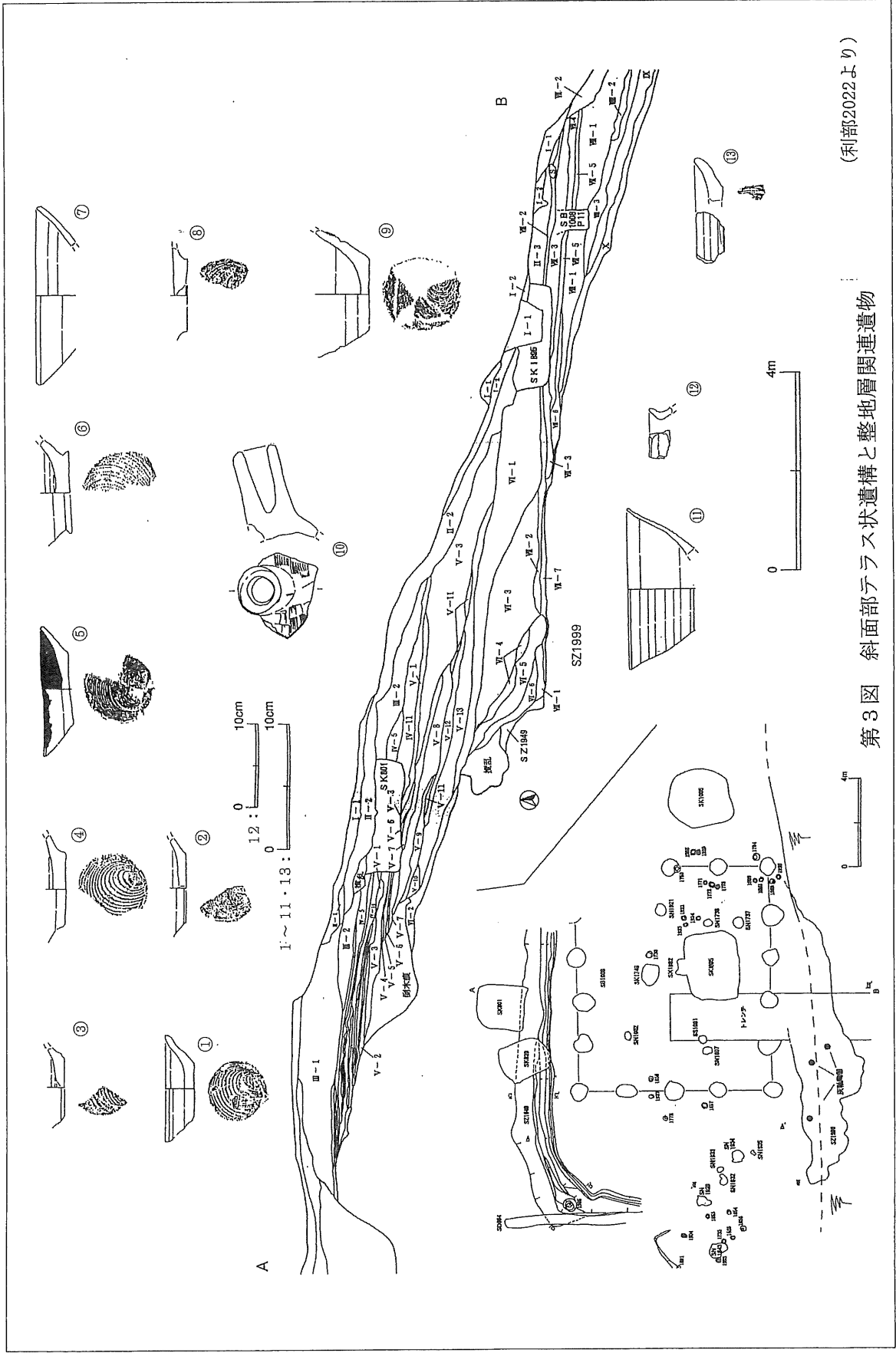
(利部2022に加筆)

第1図 虚空蔵大台滝遺跡の位置・範囲・遺物



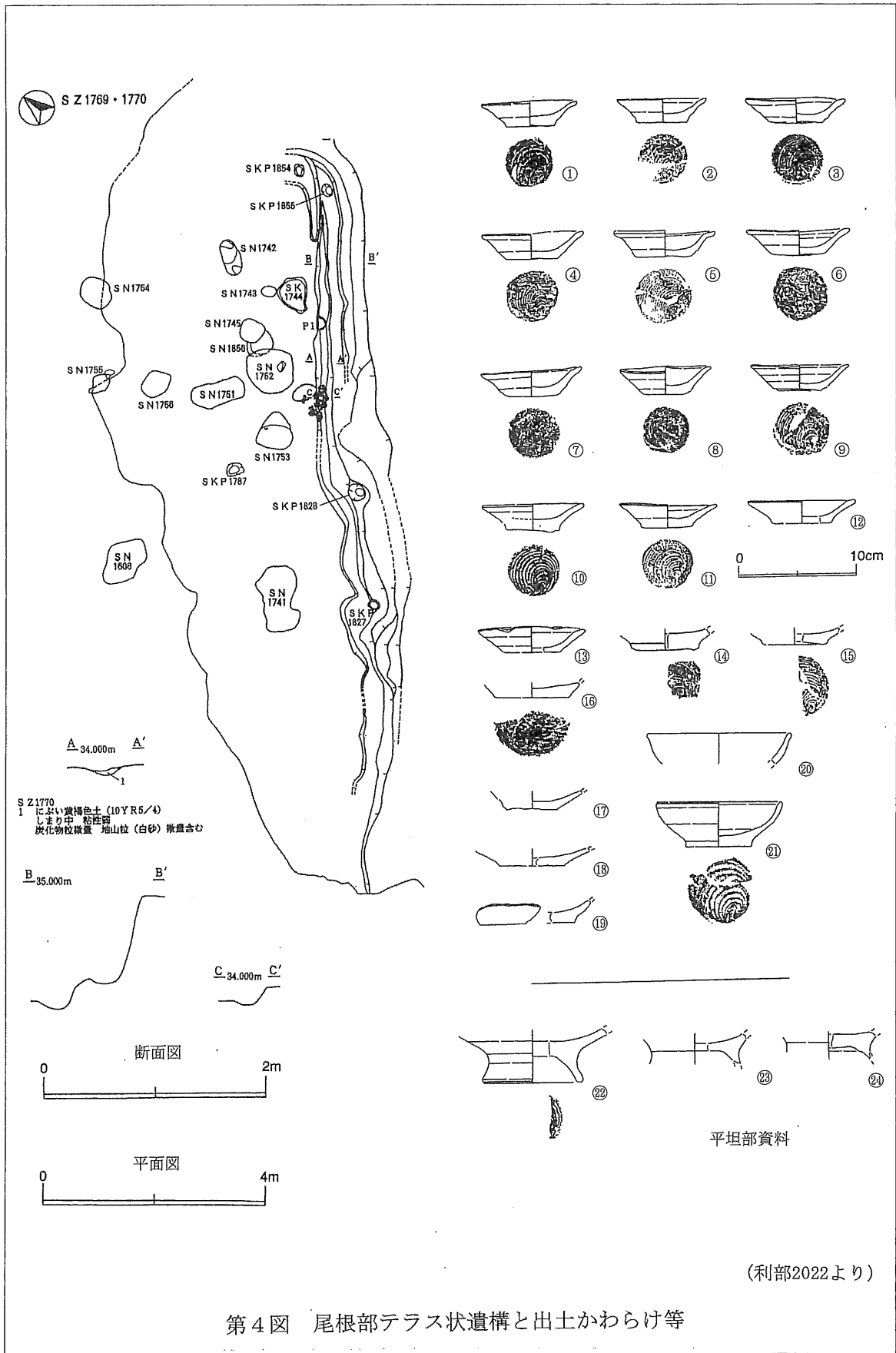
(利部2022より)

第2図 斜面部の遺構

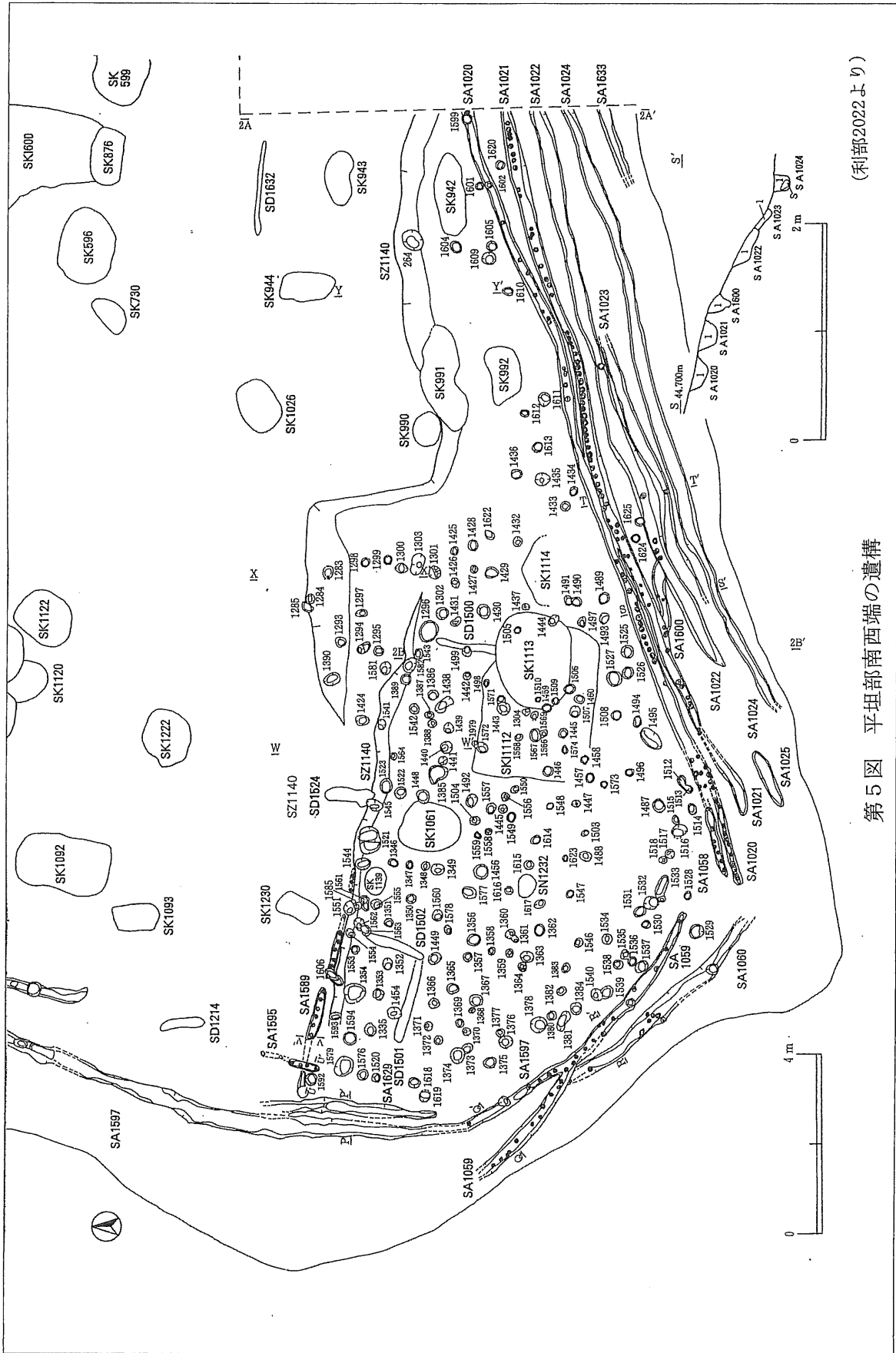


(利部2022より)

第3図 斜面部テラス状遺構と整地層関連遺物



第4図 尾根部テラス状遺構と出土かわらけ等



(利部2022より)

第5図 平埴部西南端の遺構